宣教の声
The Voice of Mission
海外邦人、欧州諸国、
および迫害下にある聖徒への宣教
2022年 7 月号
No. 478

スイス　アッペンツェル近くを走る白馬車

ミッション・宣教の声 主幹
黒田 禎一郎

信仰の視線をどこに

栄華を窮めたソロモンでさえ、
このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。
マタイ6:29

北海道・洞爺湖の大自然の中、湖畔を散策している時でした。普段、気にも留めない私が道端で咲いていた野草に目が止まりました。驚いたことに、どの野草も美しく精一杯咲いていた姿が鮮明に目に入りました。神の創造の偉大さです。冒頭のみことばが浮かび、思わずカメラ・シャッターを切りました。かつてシバの女王は賢者ソロモン王を訪ねましたが、栄華を窮めたソロモン王でさえ野の花ほどに着飾っていなかったと、イエスは言われました。何度も読み熟知している聖句です。野の花は何度も何度も見てきました。しかし、これほど感動を覚えたことはありませんでした。なぜでしょうか？それは、心静ませる中ではじめて見えた奥義でした。それまで、私の視線はそこに向いていませんでした。

そこで、私は自分の**「信仰の視線はどこに」**向いているか自問しました。

マルコの福音書14章に、ひとりの女性が純粋で非常に高価なナルド油の入った石膏の壺を持って来て、その壺を割り、イエスの頭に香油を注いだ記録があります。女性に対して2つの見方がありました。憤慨した人たちは「何のために、香油をこんなに無駄にしたのか。この香油なら、300デナリ（年収額にほぼ相当）以上に売れて、貧しい人たちに施しができたのに。」と言いました。もうひとつはイエスの視線で、「そのままにしておきなさい。なぜこの人を困らせるのですか。わたしのために、りっぱなことをしてくれたのです。」という評価でした。ここで注目したい点は、その女性の視点です。彼女はまるでイエスだけが見えているかのように、周囲を意識せず、高価な香油の入った壺を割り、イエスの頭に注ぎました。女性にとって、イエスが人生の目的であり、すべてでしたので、何をどれほどささげても十分ではありませんでした。それが彼女の視線でした。イエスは彼女の美しい行いを評価し、福音が伝えられる所でどこでも語られると祝福されました。

女性の視線は正しいお方に向いていましたから、イエスは高く評価されました。私は「信仰の視線をどこに」向けているかと、野の花から気づかされました。それは日常生活ではない静思の内に与えられました。神の奥義を知る鍵は、そこにあることを教えられました。

コロナ禍の海外邦人宣教19

オセアニア在住邦人宣教

オーストラリア・ブリスベンJCF
代表　菊 池 俊 介

この度は主イエスの恵みを受け、2ヶ月に渡りコロナ禍におけるブリスベンの宣教現状と題して原稿依頼を承り感謝しております。今月はまずJCFの簡単な紹介、コロナにおいてどう変わったか、そしてコロナ収束が見えそうな現在における当地の宣教状況を日本人とブリスベンに焦点を当てて紹介させていただきます。

ブリスベンJCF

JCF（日本人クリスチャン交友会の略称）は、ブリスベンを含む近隣地域に於いて邦人の信仰生活の拠点となり、現地教会との協力で神の御心がなされることを願い、月一回の集会の交流と礼拝を持ち神を賛美しています。現在、ブリスベン郊外のリバーライフバプテスト教会の小チャペルを提供され、20人から30人が集まり集会を持っています。

JCFが発足した当時は日本人の数もあまり多くなく、いくつかの小さな群れが信仰の火を守っていました。クィーンズランド州の宣教の連絡の拠点となるべく、更に日本人に対する宣教を盛り上げるためにもJCFは発足しました。私たちの家から始まったミニストリーは、神様に育てられ当時の日本人集会にも支えられ、複数の教会教団の協力のうちに、多くの日本人信者や無信者との関わり合いを持ってきました。

コロナ禍で

ところが2020年のコロナウイルスの出現によって国境が閉まり、滞在を不安に思う学生達が日本に帰ることになりました。さらに、数ヶ月間の教会の閉鎖が決定され、JCFも食事会の閉鎖に次いで、4月からは集会も閉鎖に至り、代わりにオンラインで礼拝を始めることになりました。（世界中で経験されたことと思います。）政府と教会の助言を受け、終わりの見えない空白の中、お互いの安否を確かめ、電話で連絡を取ることでかろうじてつながりを感じていました。当然、大学での「ママめし」の活動も停止になり、家に人を呼ぶことも、集まることもできなくなった期間は、事実上オンラインを除くすべてのミニストリーが停止しました。そんな時、現地の協力教会が、飛ばなくなった航空便の機内食を引き取り、取り残された留学生や外国人の為に、食事を届けるミニストリーをはじめ、JCFも日本人滞在者に食事を届ける奉仕の一環を担い、数カ月にわたってサポートを続けることができました。オーストラリアの永住権を持っていない一時滞在者たちには収入を得る方法がなくなってしまったからです。混沌、混乱の中でも神様の愛を繋ぐ、助け合いの奉仕ができたことは感謝です。

コロナ中に再開された礼拝

新しい形へ

コロナによる変化において、オンラインでの新しい形の集まりが実を結び始めることを感じます。自分の家、又は好きな場所から参加できる、という気楽さのためか、新しい方の参加が見られます。更にオンラインから始まった聖書勉強会も始まりました。邦人の婦人たちが、マルーカ、そしてブラウンズプレインズなどで勉強会が始まり、今では実際に集まり学びをされています。若い人々を相手に、「和みの家」という交流会が2年ほど前から始まり、オンライン、または家で集まったりして交流、そして聖書の学びを続けています。時々、ピクニックや映画会、食事会なども計画、実行しています。帰国した学生たちと聖書の勉強会を続けられる事も感謝です。コロナ禍以前の活動に比べると、礼拝参加者も半分ほど、「ママめし」という、大学において日本人の学生に食事を提供、相談に乗ったり、JCFや他のクリスチャンのイベントの案内をしていたミニストリーも、今では2年ほど中断されています。前述のJCF集会前の会食も中断されている状態です。今では学生が少しづつ戻りつつある状態なので、近いうちに再開したいと考えています。コロナ中期から、各自の自宅で小規模の交流の集まりが持たれ、そこで新しいつながりが育まれてきたことを感謝しています。

これからのブリスベンJCF

ある教団の統計によると、民族系の教会では先進国から来た会衆の方がコロナによって影響を受けている傾向があるそうです。現地の教会でも大きな教会の方がコロナ前に比べ参加者が減っている状態です。JCFも含め、徐々に元のミニストリーの形に戻りつつありますが、人の目から見た展望は難しく感じられます。以前のミニストリーを再開するにあたり、日本の皆さんの熱心なお祈りをお願いします。さらに新しく始まった聖書勉強会や、新しいミニストリーの担い手の事も、覚えてお祈りくださいますようにお願いします。来月はJCFの今までの歩みとこれからの展望という形で紹介させていただきます。　（つづく）

コロナ禍で残された
日本人留学生に
食事を届ける

伝道、プレゼントにもおすすめです。
聖書の集い・連続メッセージ
「讃美歌詩・聖歌詩の背景から学ぶ信仰」
第1巻〜第9巻 刊行
多くの人たちに親しまれている
讃美歌詩・聖歌詩の背景にある
作詞者の信仰に焦点をあてる
励ましのメッセージ集です。
中綴じB6サイズ ¥500（税別）
ご注文は「ミッション・宣教の声」事務局まで。
その時、わがたましいは歌う
ミッション・宣教の声 主幹 黒田 禎一郎

海外伝道シリーズ

旧東ヨーロッパの教会と信者は今

170

ウクライナ特集　3

黒田禎一郎

難民受け入れ施設

ドイツ・ニーダーザクセン州には、現在約4万5千人のウクライナ避難民が登録されています。彼らの受け入れはニーダーザクセン州連邦政府が行い、キリスト教施設（修道院やプロテスタント保養施設等）が、実質的に愛の奉仕によって受け入れています。中でもハノーファー市は、16教会と慈善団体が受け皿となりこのプロジェクトを推進しています。約4千万円もの必要資金は、「トラウマを抱えた難民のためのネットワーク」への献金で支えられています。中でも増加する避難民の子どもたちのケアーとして、「避難民の子どもたちの電話」相談コーナーが設けられ、専門家の相談員が配置されています。相談はニーダーザクセン州の各都市でも利用できます。

スマホから電話相談が可能

ウクライナのドイツ人

ドイツの一つの州連邦に、これだけ多数のドイツ系避難民が入ってきたのには理由があります。ウクライナには古い昔からドイツ人およびドイツ系の人々が多く住んでいました。しかし今回のロシア軍侵攻により、彼らは国から追い出されました。「国際メディアエイド」（IMH）によれば、マリウポリのドイツの「ドイツ文化センター」（GCC）は完全に破壊されました。GCCはドイツ語を話す人たちが集まる大切なセンターでしたが、ミサイルや手榴弾等の火による攻撃は止むことなく繰り返され、最終的にはGCCは燃え尽きてしまいました。その建物はロシア軍侵攻直前に改装されたばかりで、文化イベントや語学コース等を提供していました。しかしロシア軍侵攻によってマリウポリから人々の姿は消え、ドイツ系の避難民はドイツへ駆け込んできました。おそらく彼らの多くは、戻らないだろうと言われます。今回のウクライナ戦争で、ドイツ語を話す少数派は事実上一掃されることとなりました。

ウクライナの最後の国勢調査によれば、ドイツのルーツを持つ人々は約3万人いました。しかし実質は少なくても2倍以上の人々がいたと言われます。IMHのビオン・アクステイナート・ディレクターによれば、国政調査の際にはドイツ人、あるいはドイツ系と名乗ることが危険でした。その理由は共産主義時代に迫害され拷問を受け、そして追放されていたからでした。そのような悲劇的歴史を持つドイツ人とドイツ系の人々は、何世紀にもわたりこの地域に定住し国の発展に大きく貢献してきました。ここに歴史の悲劇を見るのです。

ドイツ文化センターのロシア軍侵攻前（左）と侵攻後（右）

聖　書

このような異常事態の中、ドイツ国際ギデオン協会（本部：ヴェッツラー）は、ウクライナ避難民のために75万冊の聖書（70万冊のウクライナ語聖書と5万冊のロシア語聖書）を印刷発注しました。ギデオン協会のマネージング・ディレクター、ヨハネスウェンデル氏は、「ウクライナ戦争勃発以来、ウクライナ語の聖書を求める声が教会や聖徒たちから非常に高まっている。それはウクライナ避難民に届けたいからである。」と語っています。これほどの高い聖書需要は、歴史上初めてであると言われます。大量の聖書印刷は短期間では難しく、先ず15万冊の印刷が終わり、これから45万冊の印刷にかかります。それに近隣の国々のギデオン協会にも協力を依頼しています。ウクライナ語聖書はドイツ国内だけでなく、避難民がいる近隣諸国にも配布される予定です。ドイツ国際ギデオン協会には約4,600人の会員が年間約60万冊の聖書を配布してきました。

ウクライナ語の聖書が求められる

「南東欧宣教会」（本部：ドイツ・ズィガーランド）所長フリーデマン・ヴンダーリッヒ氏は、次のよう語っています。「このような聖書需要の高まりは、ウクライナ戦争によって始まった。しかし、それは現代のクリスチャンへの呼びかけでもある。ウクライナ戦争は現代のクリスチャンが霊的に目覚めるよう、神からの呼びかけでもある。誰も苦難や痛みを望む者はいないが、神は痛みや苦難を通し開眼するよう願っておられる。なぜなら最近のキリスト教界は、豊かさと繁栄ばかりを求める傾向にあるからだ。」

確かに聖書は終わりの時のしるしとして、戦争、恐怖、民族間の争い、飢饉による大惨事、災害等について語っています。ウクライナ戦争を通して、現代に生きるキリスト者は姿勢を熟考する必要があります。私たちは災害や戦争が起こることを望むのではなく、「主よ。来てください！」とイエス・キリストが再び来られることを望むものです。「南東欧宣教会」はウクライナに25人、ロシアに40人もの宣教師を送りキリストの福音を語り伝えています。お祈りください。

（つづく）

フリーデマン・ヴンダーリッヒ氏

壁を越える母の愛、壁を打ち砕く父の愛

一つの国であった朝鮮半島が、1948年に北緯38度線に分断されてから70年以上の歳月が経ちました。別々の舵を取った二つの国に、長い時間が流れても、人々の痛みや悲しみはそのまま置き去りにされたままです。南北間にどれほど多くの引き裂かれた親子がいて、家庭があるでしょうか。地続きの隣国ですが、両国間の壁は彼らにとって、どんなに高く感じることでしょうか。

明暗を分けた判断

オ・スンジャは、北朝鮮では稀に見る裕福な家庭で、生まれ育ちました。教育環境にも恵まれ、才色兼備な彼女は医師となり、家柄も良いため党幹部の男性と結婚し、一人娘にも恵まれ、順風満帆の日々を過ごしていました。1990年代に北朝鮮全土を襲った大量餓死の時期でさえ、スンジャの一家は困窮することはありませんでした。成長した娘も母と同様に医師となり、一家は飢えと病に苦しむ人々を助け、手を差し伸べ続けました。そんな時、スンジャは大韓民国からの文物に触れるようになり、そこには自分が全く知らなかった自由というものがあり、彼女は次第にこの未知の自由世界に心が向くようになりました。

スンジャにとって大きな転機は、中国に住んでいる親戚宅をたまたま訪問したことでした。彼女はこの親戚を通して、生ける真の神を知るようになりました。そして、実は自分の母親も敬虔なキリスト教徒であったと、スンジャは悟りました。いつも優しく、聡明な母の面影に、誰もいない場所で膝まづいて祈る姿を思い出しました。スンジャは裕福な暮らしができても、信仰の自由さえ許されない祖国への違和感と自由への切望を抑えることができませんでした。結局、彼女は親戚宅から自宅へは戻らず、そのまま知人の助けで大韓民国を目指すことにしましたが、この判断がスンジャの明暗を分け、後々、彼女にとって大きな後悔となりました。

自由の代償

大韓民国の地に足を踏み入れた時、多くの脱北者たちにとって、脱北を成功させた喜びと安堵感、そして、ここから始まる新しい人生に胸を躍らせる瞬間となりますが、スンジャの場合は違いました。あれほど自由の世界を切望していた彼女は、いざ大韓民国に到着すると、自分は家族を置き去りにし、こんなに遠くへ来てしまったのだと我に返りました。今更ながら、自分は何と取り返しのつかないことをしてしたのだろう、国家に反旗を翻した自分の行為に、家族全員がその代償として処刑されるかもしれないと、彼女の心は一気にその不安に囚われてしまいました。またその後、結婚していた一人娘が子どもを産んだという知らせは、さらに彼女を追い詰めることになりました。生まれたばかりの愛しい孫も、自分のせいで過酷な運命を背負わされていると思うと、後悔しても後悔しきれず、自分の浅はかさを責め続け、彼女の精神状態は次第に蝕まれていきました。スンジャの新しい暮らしは、身を潜めるように誰とも接触することなく、自ら孤独な生活を選択しました。家族に北朝鮮当局の危害が及ばないように、一切の社会活動を避けました。心が癒されたくても、家族に被害が及ぶのではないかと恐れ、教会にも行くこともできず、深夜にこっそりと聖書を見ながら、涙を流し祈りました。

脱 南 者

一刻も早く、北朝鮮に戻ろうと決めたスンジャは、逃走資金を稼ぐために、病院で介護士として働き始めました。やがて、スンジャは北朝鮮への脱走を試みたものの、警察に逮捕され、有罪とされました。裁判では母親としての心情ゆえに、情状酌量が認められ、執行猶予で事が収まりました。彼女は沈黙を貫き、執行猶予を終えるとすぐさまパスポートを手にし、中国へ渡りました。皮肉にも、あれほど自由を切望していたスンジャは結局、自由を一瞬たりとも満喫することなく、死が待つ北朝鮮へと向かいました。

脱南者と呼ばれたスンジャは、マスコミにも取りだされました。彼女が自ら北朝鮮へ入ったのか、あるいは拉致されたのか、世論の様々な憶測が飛び交い、それは政治評論にまでなりました。愛しい娘にもう一度会って、謝りたい。一瞬でいいから、生まれた孫を抱きしめたい。たとえ、この肉体を失ったとしても、たましいは愛する家族のそばに帰りたかったのです。家族への愛と贖罪だけが彼女の足を北へと向かわせました。そんな母の心を誰が責めることができましょうか。スンジャの夫は妻の脱北の知らせを聞いたとき倒れ、脳出血により既に他界していました。娘と孫娘との再会をスンジャは、無事に果たすことができたのでしょうか。その後スンジャ一家がどうなったか誰も知るよしはありません。

壁を打ち砕く父の愛

北朝鮮で多くの勝利ある証の影に、このような悲しい親子のストーリーが無数に存在し、父なる神だけが、それら親子の悲しみを全てご存知であることが唯一の慰めです。なぜなら、御子なるイエス・キリストを捧げて下さった天のお父様こそ、我が子との引き裂かれた悲しみを誰よりも理解して下さるからです。オ・スンジャは、はかないながらも国家による厚い分断の壁を愛で越えた強い母でした。イエス・キリストは、人間の罪によって分断した神との厚い壁を十字架によって、打ち砕いて下さいました。私たちは大胆に父なる神のもとへ帰ることができました。北と南、この二つの国を隔てる壁は確かに厚く存在しますが、全人類の凄まじい罪で建てられた、最も強固で、厚い壁を、父なる神は愛で打ち砕いて下さいました。その壁さえも打ち砕いた御父の愛は、南北の壁もいつか必ず打ち砕かれる、そんな日が来ることを信じ祈り続けようではありませんか。

「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、」(エペソ2:14)

(名前は仮名です)(次号につづく)

朝鮮半島の分断

ド イ ツ

●第二次世界大戦後、欧州の歴史は激しく揺れ動いてきました。とくに近年は難民や避難民がドイツをはじめ欧州各国に移り住み、歴史は様変わりしています。このほど米国ユダヤ人委員会（AJC）の依頼で、アレンッスバッハ調査研究所はドイツ国内の「反ユダヤ主義」に関して調査し発表しました。調査は次の3つの質問でした。「ユダヤ人に対し、あなたはどう思いますか」という問いに対し、イスラム教徒は46%が反ユダヤ主義思想を持っていると答えました。それに対しドイツの住民は22%が反ユダヤ主義でした。次に「ユダヤ人は第二次世界大戦で大量虐殺を受けたが、ホロコーストを有利な条件としているか」（注：戦後のドイツではユダヤ人に国家的保障と厚遇がある）という問いに対し、54%のイスラム教徒が肯定しました。ドイツの住民は34%でした。三番目の「ユダヤ人は社会とファイナンスに権力を握りすぎではないか」という問いに対し、イスラム教徒は49%が肯定しました。ドイツの住民は23%でした。この調査結果によって、イスラム教徒の多くが反ユダヤ主義的な考えをもっていることが明らかとなり、かつ国レベルでユダヤ人問題が再燃しかねない課題となっていることが分かりました。どうぞ、このためにお祈りください。

●ドイツには約300万人のロシア正教会信徒がいることが分かり、その人数が増加中であることも明らかになりました。それはニコライ・ツウォン司祭（前独ロシア正教司祭主教）の発言ですが、彼は2010年から2018年まで独ロシア正教会総主教を務めた指導者です。2013年には外国籍のロシア正教徒は約131万人、2019年には220万となりました。 それにドイツ系でロシア正教徒の帰還が進み、ロシア正教会会員数は増加する傾向です。ツウォン司祭によると、もっとも多いのは約90万人のルーマニアからの正教徒です。その他、約47万人がギリシャからの正教徒、次いでブルガリアから42万4千人の正教徒、そしてジョージアの正教徒、アンテオキアから10万6千人と続きます。最近、ウクライナからの正教徒難民が多数いると考えられますが、その正確な数字は出ていません。ウクライナは総人口の約73%が正教徒です。ロシア正教総司教キリル1世がロシア軍侵攻容認発言をしただけに、ドイツ国内でロシア正教徒増加に波紋が起こっています。

ダルムシュタットのロシア正教会

●南ドイツ・オーバーアマガウで開催される世界最大級の「聖劇」は、コロナ禍の影響で2年ぶりに開かれています。今年5月14日から10月2日まで、週5日間上演されています。この聖劇はイエス・キリストの「受難週」を演じていますが、いくつもの特徴があります。今年は世界各地から約45万人もの観客が訪れるようで、聖劇は5時間30分つづき全部で103シーンあります。演じる俳優は人口約5千500人のオーバーアマガウ村民（少なくとも20年間の居住が必要）に限定されています。この聖劇には約2千人が参加し、他の村民は世界からの観光客を受けいれるホテルやペンションで働いています。そもそも一番はじめの上演は、1634年にオーバーアマガウ村墓地で行われたユニークな聖劇です。2014年にはユネスコの無形文化遺産にも登録されました。現在の劇場収容人数は約4,300人で、前売りチケットはすでに75%出ているそうです（5月末）。最高チケット販売は、2010年の99.8%でした。

最後の晩餐のワンシーン

米 国

聖書を手にする米国民▶

●米国聖書協会（本部：フィラデルフィア）は、同協会の年間報告誌に「米国人と聖書」について次のように掲載しました。それによれば、聖書をいつも用いる人は39%に減少しました。その中には教会行事に関連し年3・4回聖書に触れる程度の人も含まれます。2011年から2021年までは、米国市民の半数が常に聖書を読むという数字でしたが、コロナ禍の影響を受け教会とのつながりが希薄となったという人たちもいました。また聖書を信仰生活の中心においていない人々もいて、米国社会は聖書離れの人々が増しているようです。

「クリスチャニティー・トゥデイ」（インターネット版）によれば、コロナ禍の中で少なくても2千6百万人の米国民が聖書を読むことを中止したと伝えています。その内約1千3百万人は、以前は聖書を読んでいた人たちでした。米国民のわずか10%が聖書を開いているということです。現在、米国民の77%が聖書を持っています。男性より女性の方が、若者より高齢者の方が、また他の民族グループよりもアフリカ系アメリカ人が聖書を多く読んでいると報道されました。米国聖書協会は1816年に創設され、世界中に聖書の影響を与えてきました。お祈りください。

●米国カリフォルニア州ロスアンジェルス郊外ラグーナウーズにある台湾人教会で、5月15日礼拝に出席して人が突然発砲し、一人が死亡し数名が重症となりました。事件は牧師が2年間奉職し台湾に帰国する直前の愛餐会で起こりました。犯人はその場で取り押さえられましたが、捕らえたのはなんと5人の高齢者（66歳から92歳）でした。彼らは犯人から銃を奪い上げ延長コードで体を縛り上げて、警察に渡しました。この勇敢な5人の行動によって、それ以上の犠牲者が出ることが止められました。犯人はアジア系で礼拝に参加して、愛餐会に参加していました。この台湾人教会は約10年間にわたり地域に根差した教会活動を行ってきました。警察はその詳細を発表していませんので、それ以上のことは不明です。

不幸な事件が起こった教会

ハンガリー

カタリン・ノヴァック大統領

5月14日、ブダペストの国会において福音派クリスチャンの新大統領が誕生しました。カタリン・ノヴァック大統領（44歳）は3人の子どもを持つ母親であり、改革派教会の敬虔な信徒です。ノヴァック大統領は就任演説において、「私はハンガリー民族を強い民とする。キリスト信仰に立ち、政治を先導し国民の生活改善に努め、愛をもって児童教育を進める。」と宣言しました。任期は5年です。お祈りください。

エリトリア

キフル・ゲブレメスケル氏

国際人権委員会（IGFM）とキリスト教メデイア「イデア社」は、2022年6月の「今月の囚われ人」としてエリトリアのキフル・ゲブレメスケル氏を挙げました。獄中生活を過ごしているキフル氏は、現在67歳で18年間も囚われの身です。彼は2004年5月23日、首都アスマラの自宅で逮捕されました。当時の彼は数学者でエリトリア福音アライアンス同盟の議長であり、「家の教会」のネットワークの総責任者でした。2003年5月に発令された宗教令によって、彼の信仰活動は禁じられました。アカデミカ―である彼は当初、警察署で身柄が拘束状態にありましたが、その後アスマラの作業刑務所に移されました。そこに入った囚人は先ず何十年も外部に出ることはできませんが、彼は病気となり病院に患者として運ばれたことから消息が明らかとなりました。

彼は特別に理由もなく捕らえられました。エリトリア政府公認教会はイスラム教以外では、正教会（オーソドックス）、カトリック教会、ルター派教会のみです。その他のクリスチャンは信仰活動が違法であり、危険な状況に置かれ突然の逮捕も起こっています。そして拷問を受け改宗を強いられています。公式に認められたキリスト教以外は、すべて違法です。キフル・ゲブレメスケル氏は2005年にも「今月の囚われ人」として、IGFMとイデア社から挙げられていました。エリトリアは1993年以来、イザヤス・アフェヴェルキー大統領による独裁政権が続き、信仰の自由は全くありません。人口約600万人の51％がイスラム教徒、47％がキリスト教徒です。どうぞ、お祈りください。

ナイジェリア

誘拐事件に巻き込まれるナイジェリアの教会

ナイジェリアでは近年、誘拐事件数が急増中です。北西部は特に影響を受け、カドゥナ州だけでなく南東部地域にまでおよんでいます。ナイジェリア・メディアの報道によれば、誘拐事件の犠牲者は主に聖職者です。2021年前半には、毎日平均で13人が誘拐されました。ほとんどの誘拐事件は公に報道されないため、実際の誘拐事件数ははるかに多いと思われます。国際人権委員会は、犯人側が要求する身代金に応答した場合は少なくとも15年の刑を与えるべきであると批判しています。なぜならイスラム教過激派組織「ボコハラム」、IS（イスラム国）、そして他の過激派組織はそれによってテロ活動を続行するからです。国際的宣教団体「オープン・ドアーズ」は、ナイジェリア政府は被害者家族を支援し、その実態をつかむべきであると主張しています。歯止めが利かない誘拐事件と身代金要求は、どこかで終止符を打たなければ、テロ活動を支援するになります。どうぞお祈りをお願いします。

ロ　シ　ア

ロシアにおける少数民族の人口は、最近増加傾向です。福音派の宣教師は単にロシア人ターゲットから、少数民族への宣教に力を入れイエス・キリストの福音を伝える備えをするよう求められています。そこで先ず彼らの言語を習得する必要があります。宣教学の専門課家であるヨハネス・ライマー教授（世界福音宣教アライアンス同盟）は、この考えを推進する立場です。仮にウラジミール・プーチン大統領政権がやがては崩壊するとするならば、ロシアの少数民族への伝道は加速化するであろうと語っています。そこで他民族国家であるロシア福音派教会は、少数民族の言語で伝道を進め、未来に向けてメッセージを送るべきと述べています。例えば、タタールスタン人は自分たちの言語で礼拝や集会を開き、母国語で同胞にキリストの福音を宣べ伝えるべきです。お祈りください。

キューバ

5月6日、首都ハバナの高級ホテルで爆発がありました。ホテル近くのバプテスト教会は大きな損害を受けました。爆発原因はガス漏れと考えられますが、少なくとも31人の人々が犠牲となり命を落としました。バプテスト教会の天井部分は完全に破壊されましたが、幸いにも負傷者はいませんでした。しかし他教会の信者であるドロテー・クーズ女史は、偶然にも事故現場近くにいたため負傷しました。ホテルはコロナ・パンデミックで閉鎖中でした。キューバには、バプテスト教会が4か所あり、約10万人の信者がいます。どうぞ、お祈りください。

破壊されたバプテスト教会会堂

ミッション・宣教の声 The Voice of Mission
〒541-0041 大阪市中央区北浜2-3-10 VIP関西センター 5F
TEL06-6226-1334 FAX06-6226-1336
E-mail senkyo@vomj.jp http://vomj.jp/
発行人 黒田禎一郎
年間購読料 ¥2,500（送料込）

郵便振替口座 00940-3-301623
銀行口座 三菱UFJ銀行 堺東支店（店番205）
普通口座 3623132「ミッション宣教の声」
The Voice of Mission
MUFG Bank,Ltd. Sakaihigashi Branch
Bank account No.3623132 SWIFT CODE : BOTKJPJT
Bank Address : 59-2 MIkunigaoka-Miyukidoori,Sakai-ku,
Sakai-shi,Osaka-fu 590-0028 JAPAN TEL:81-72-221-3041

編集後記

■いつも祈りお支えくださりお礼を申し上げます。ウクライナ・ロシア戦争は長期戦となり、双方に多くの犠牲者と負傷者が出ています。一時も早く、終息しますよう祈ります。

■ミッションでは「ウクライナ支援」を募り、現地の教会（集会）と避難民たちを支援中です。詳細はHPをご覧ください。

■今号の海外邦人宣教は豪州ブリスベンからです。コロナ禍で闘っている海外邦人宣教に、主の祝福を祈ります。今月も「宣教の声」をお届けできる恵みに感謝します。

1981年12月初版発行（毎月1回1日発行）